

「民俗学者 柳田国男」(福田アジオ)
神奈川大学評論ブックレット 12 御茶ノ水書房

1. 柳田国男の生涯

関心の変化

【前提】(1900-1910年、農業政策従事期)

「農本主義」(農村は資本主義的な生産になじまない。農村は大切な所/農業は大切だから保護して守らなければならない)

に反対: 農業も社会の変化に対応して変わらなければならない(社会全体が資本主義的な生産と流通になっていくのだから、農業もそれに対応して発展しなければならない)。

→柳田国男の説は認められない。農業政策に挫折。

【初期】(1908年～)

① 九州(宮崎県椎葉村)旅行

→最初で最後の民族調査の報告書『後狩詞記(のちのかりことばのき)』

② 佐々木喜善(岩手県遠野出身)との出会い

→『遠野物語』

関心内容: 山民・山人(山間部に住む狩猟や焼畑を行う人々)。山間部を移動するさまざまな人々を対象に研究

→民俗学の研究を始めるきっかけ

【確立期】(1920年代)

関心内容: 常民(ごく普通の農民のこと)。平野部の農村で稲作を中心に農業を行っている大多数の農民の歴史を研究

→民俗学は常民の歴史を明らかにする学問と主張

【後期】(戦後)

民俗学研究所を作る(1947年)。

→野の学問のままでは発展しないということで、大学で民俗学を研究できるように努力

2. 柳田民俗学の三つの基本的な特徴

① 歴史研究としての民俗学

歴史を明らかにすることが民俗学の目的、変化することを明らかにするために民俗学を研究した(世の中に変わらないものはないから、放置しておくとき昔の姿は分からなくなる。変わらないものを明らかにするものではない)。

② 「経世済民」世のため人のための民俗学

実際の社会で要求していること、社会で起こっていることを解明することを民俗学の使命とした。

③ 言葉を重視した民俗学

言葉の歴史を研究するのではなく、言葉を窓口にして社会のさまざまな仕組みや行事や儀礼や信仰の歴史を明らかにした(柳田国男が切り開いた独特の研究方法)。

日本の民俗学は調査するとき必ず「それは何というか」ということを聞く(ある事柄、物、行事、行うこと、等、何でもそれを表す言葉があり、その言葉を調査のとき記録する)。

3. 民俗学研究と使命感

初期柳田国男の民俗学と近代植民地

【民俗学の確立期】

「経世済民の学」現在の問題がなぜ起こったのかというような背景、条件あるいは原因を研究する。柳田国男の民俗学の方法はいずれもこの時期に作られている（「重出立証法」、「圏論」）。

1934 - 36年、全国50ヶ所以上の村に調査員を派遣して調査

山村調査のために採集手帳という文庫本の大きさのものに質問項目を1番から100番まで印刷したノートを作成。この手帳を持って山の中の村に行き20日間滞在して印刷された質問について調査。

日本中から同じ質問に対する答えを集めることを計画

（同じ質問に対する答えが地方によって違うことを期待）

日本中から大変信頼性の高い資料を集めて、それを比較してその地域差からそれぞれの問題の歴史を明らかにしようとした。

【1940年代以降】

アメリカが一番すばらしい、アメリカに何でも理想を求めてアメリカに近づくことを良いとする世の中の動きを柳田は非常に不安に思った。それで日本人の自己認識、日本人は日本人として素晴らしいのだということを主張する論文。

後期の柳田国男の問題意識、民俗学の特色は「海上の道」に一番よく表れている。「常民」ではなく「日本人」という言葉で表現。

柳田国男の民俗学を、その民俗の担い手あるいは民俗研究の目標ということで考えると、

【初期】 1910年代は「山人」の民俗学

【確立期】 1930年代は「常民」の民俗学 →柳田国男以降の民俗学の方法や対象

【後期】 1950年代は「日本人」の民俗学 →柳田国男以降の民俗学の目的や性格

4. 柳田国男の方法

方法の特色

民俗学の方法ともっとも関係するのは一番目の歴史研究としての民俗学

民俗学の特色

① 人々の行為としての民俗をもっぱら研究した。

② 歴史研究としての民俗学という傾向が非常に強い。

（文字に頼る歴史研究では普通の人たちの生活の歴史は分からない）

③ 同じ社会、同じ文化の中での地域差で、その社会の地域の歴史を考える。

（日本のいろいろな所から資料を集めて比較すると歴史が分かってくる→「重出立証法」）

④ 歴史は必ずしも進歩とか発展とは限らないと考えた。

（最初の姿に理想的／矛盾のない姿を認め、後の変化によって矛盾や問題が発生するという考え方）

→「新国学」（国学：出発に純粋な日本の理想的な状態において、それに仏教や儒教の影響により次第に日本は悪くなったという考え方）。但し、国学は文献主義であるところが大きく違う。

現在のごく普通の人たちのやっている中に、日本の古くからのものがあるのだということを主張。

⑤ 日本民族（日本語を日常的に話す人たち）に限定した。

歴史学批判

旧来の歴史研究は文字で書かれた資料に非常に偏っているという批判から出発。

文字で書かれた記録というものは政治権力、支配者に偏っていることに加えて、本当の事実ではなく、後の世に伝えたいことを書き、伝えたくないことは隠すという作為性がある。

歴史資料＝「計画記録」

→これで歴史を研究することはもう古い。「計画記録」にしばられず、書いた人の意図とは関係なく偶然書かれたもの＝「偶然記録」を使う歴史研究を認めるべき。

→「偶然記録」というものの価値を歴史研究が認めるのであれば、「採集記録」(＝現実にやっている行為を調査して記録し資料にする)という形で、積極的に今の人々のしていることを記録して資料に使うべき。

◎何の問題もなく毎日平和に過ごした生活は文字に記録されることはほとんどなかった。→平和で全く問題のない所は、歴史がなくなってしまう。人々がそれぞれ自分たちの努力と工夫で平和で豊かな生活をしようとしてきたことは分からなくなってしまう。

新しい資料と方法の発見

文字に頼らない実際に人々がやっていることを資料として考えていく、実際人々がやっていることを記録する＝「民俗資料」。民俗というのは簡単にいえば上の世代から伝えられてきて現実に今みんながやっていること：ナラワシ、シキタリ、イイツタエ

現在人々がやっていること、頭に知識として持っていること、時や場合によって口にだして語ること、それを調査して、それを資料にして経験を超えたもっと古い歴史を明らかにしようとした。

民俗学はその人の経験よりももっと上の世代からの歴史を知る手がかりとして現在のいろいろな人々の行為を聞いたり確認したりする。

現在の人々のやっていることからどうして歴史が明らかになるのか？→地域差、それぞれ違った所から違ったことを集めてきて比較する(比較研究)。比較の結果、古い新しいということを答えとして出し、古いものから新しいものに変化したと解釈した。

どのように比較するか

『歴史科学としての民俗学』(G. L. Gomme)

ゴムの方法：要素に分解して、要素の組合せから各地の材料を比較して、そこに変遷を理解していく方法(ある一連の行事を構成要素に分けて、その組合せの地域差を見る。その組合せの違いからどの事例にも出てくるものを本質要素、場所によって違った要素になるのを変化要素として捉える)。

周圏論的理解

重出立証法について柳田国男は「注意深く比較すれば」新旧が分かり、変遷が出てくると言った。その「注意深く比較をする」基準として示したものが周圏論。

周圏論：民俗の各地の違いを分布図、地図に描いて、その地図の上である特定の分布を示すことによってそこに歴史を発見しようという方法。

最初は方言の地域差の説明として提唱→言葉ではなくて民俗として人々が行っていることについても周圏論として理解できる。

但し、柳田国男の理論とか仮説というのは全部が整合的に出来ているのではなく、その時の彼の主張

しなければならぬことに対応して考えられており、詳しく検討していくと柳田国男の説の中には互いに矛盾する考えが入っている。

民俗資料の三分類

調査者が民俗事象に近づいていく順番、そして近づいていくに連れて了解する方法の順番で資料を分類した。その民俗資料の分類は調査の主体、誰が調査すると把握できるのかということに関係する。

(調査とか観察とかいう言葉を使わずに、気軽に比較的自由にできるというイメージの「採集」という言葉を使った)

- ① 目で見て分かる民俗：「生活外形」、「有形文化」
…目の採集：「旅人の採集」
- ② 耳で聞いて理解できる、記録できる民俗：「生活解説」、「言語芸術」
…耳の採集：「寄寓者の採集」
- ③ 心の採集で把握できる民俗：「生活意識」、「心意現象」(人々の中にある価値観、物の考え方、物事を判断する基準とか外にはなかなか表れないもの)
…心の採集：「同郷人の採集」
～最も重要(柳田国男は多くの人たちに、それぞれ自分の住んでいる所、自分の暮らしている所で自分の生活の中にある民俗を調査すべきと強く言った)
- ◎ 心意現象を把握することが大切であり、同郷人の採集が重要であることを説くための民俗事象の分類案と言える。

調査は全国各地の人、研究は中央の人(柳田国男とその直弟子)という調査と研究の分離。

『採集手帳』の注意事項：「調査者は勝手に自分で解釈を加えないでください、聞いたことをそのまま書いてください。」→現地に行って調査した人が、その調査地について何か考える、分析する、解釈するという事は禁じられていた。

調査結果をまとめる一般的な方法は、調査地ごとに整理して記述していくという方法であるが、『山村生活の研究』は100の質問文ごとに50カ所の結果をまとめていく方法を取った。→比較をしやすいうようにまとめた(50カ所のうちあまり良い答えが書いてない所はみんな省かれ)。

柳田国男の著書に学びつつ、彼から自立して、主体的に問題を発見し、独自の方法で解答を出していく努力を今こそしなければならない。